

音楽教育 実技研修会 終了報告

<p>テーマ</p>	<p>豊かな感性に ときめく心を ～互いに学び合い、高め合い、表現する力を育む指導のあり方～</p>	
<p>日時</p>	<p>令和 元年 7月18日(木)</p>	
<p>会場</p>	<p>石狩市立樽川中学校</p>	
<p>講師</p>	<p>渡辺 景子 氏 (肩書:札幌教育大学附属中学校教諭)</p>	
<p>参加者</p>	<p>約20名</p>	
<p>研修会 の 様子</p>		<p>創作の分野で研究を深められている渡辺先生をお迎えして樽川中学校3年生を対象に授業が行われました。 音の動きを最小限に抑え、パターン化された音型を繰り返し、その中で重なりの変化を生み出す音楽であるミニマルミュージック(日本では久石譲が第一人者)を扱って楽譜に根拠をもとめ、楽曲を理解しようとする意欲へとつながる授業を展開していただきました。</p>
	<p>本授業は、音楽を形づくっている要素(音色、テクスチャ、構成)を知覚し「魔法のフルーツバスケット」を教材に言葉の組み合わせ方や全体構成を工夫し、創作の活動を取り入れた授業展開でした。 はじめに生徒たちは「魔法のフルーツバスケット」を聴き、リズムの重なりの特徴を捉え、最後に全員の手拍子がぴったりと重なる気持ちよさを感じていました。</p>	
	<p>その後、ミニマルミュージックの技法を活用してグループでテーマを決めて言葉を考えて当てはめる創作を行いました。生徒たちは試行錯誤をしながら音の重なり方を工夫しながら活動をしていました。 事後研では小学校で学んだことを中学校へつなげながら創作のはじめとして言葉の抑揚を使ったリズム作りを行っていること、また、タブレットを使用することで作ることに集中でき演奏の技能がなくても自分の作品を耳にすることができるメリットがあるなど紹介されました。</p>	
	<p>音楽の授業を行う上で大事にしていることとして、作曲家、演奏者、鑑賞者の3つの立場を意識して行っていくことが大事ではないか、歌唱の「花」であれば作曲者が1番と2番と3番で節を変えたのはなぜか、またフェルマータをつけたのはなぜかという作曲者の視点、それをどれくらい伸ばせばよいのかという演奏者の視点、どれくらい伸びていると良い演奏なのかという鑑賞者の視点などを整理することで、思考を深めていく授業ができることなど今後の授業を進める上でとても参考になるお話を聞くことができました。</p>	

